

一九五〇年代の「코주부 (コチュブ)」

— 雑誌『아리랑 (アリラン)』と新聞『The Korean Republic』から —

牛田 あや美

はじめに

二〇一八年十月五日に韓国の金海市にある「金海文化の殿堂」と呼ばれる「金海芸術スポーツ会館」にて開催された「韓国現代漫画の父、金龍煥死後二十年を記念した国際シンポジウム」で招待発表をさせていただいた。タイトルは「日本における金龍煥の発見」であった。金龍煥は、日本ではなじみのない名前である。しかし、戦前・戦中の日本の少年・少女雑誌では、売れっ子の挿絵家であった。当時の日本での筆名は「北宏二」である。発表は、「北宏二」の日本のライバルが誰であり、どのような過程を経て、売れっ子挿絵家になったのかを話した。彼は一九一二年、日本統治下の外地であった現在の金海市に誕生し、一九九八年アメリカで亡くなっている。

彼が若き挿絵家としてデビューしたのは一九三三年のことである。これ以前に挿絵家として書籍に描いていた可能性もあるが、現時点の調査では一九三三年が最初である。彼の自伝をみると、師匠である挿絵家・江島武夫のアシスタントをしていたことが記されている。江島の仕事のなかでも一九三一年から出版が開始された三省堂の『図解現代百科辞典⁽¹⁾』での仕事が役に立ったと書かれている。

ひとまず一九三三年をデビューの年とすると、彼は一九八〇年代まで日本の出版界で活躍していた。「北宏二」という筆名を使用しているのは、一九六〇年代ごろまでであり、その後は日本でも「金龍煥」と記している。朝鮮・韓国での活躍は、ほぼ知らなかったのだが、今回このシンポジウムの際、金龍煥を記念した個展が開催されていた。日本では見つけることのできない、戦後の朝鮮・韓国で活躍した挿絵、マンガの数々が展示されていた。かなりの多さにびっくりした。

前回の紀要に金龍煥については、記述しているので、詳しくはそちらを参照していただきたい⁽²⁾。彼は日本の美術大学へ勉強にきた留学生であり、その時

に挿絵家としてデビューしている。それからは日本での作家活動となる。彼は、朝鮮に戻るのが一九四五年であり、再来日し、活動し始めたのは一九五九年である。

つまり彼の朝鮮・韓国での活動は一九四五年から一九五九年のたった十五年間である。もちろん日本と朝鮮・韓国を行き来していた形跡があることから、十五年のみというわけではないが、日本での活動と比べると少ない。それにもかかわらず、今回の金龍煥の個展はたくさん作品が展示されていた。おそらく普通の挿絵家やマンガ家であるなら、全生涯の作品として展示されてもおかしくないほどの量である。

金龍煥の研究はキム・ソウォン氏の「김용환의 일본에서의 작품활동 - 1930년 - 1960년대 삽화를 중심으로」⁽³⁾において戦前の日本での活躍の一部を書いた論文と一九四〇年代の挿絵を中心に⁽⁴⁾において戦前の日本での活躍の一部を書いた論文とゴン・ヨンミン氏の「아시아 재단 지원을 통한 김용환의 미국 기행과 기행 만화 (아시아財団の支援を通じた金龍煥のアメリカ紀行と紀行漫画)」⁽⁴⁾とを見つけた。他には韓国漫画通史において彼の作品を記した本はいくつかあるが、それは研究という類のものではない。韓国における彼の研究はまだ始まっていないのだろう。また彼が韓国で活躍した時期は、朝鮮戦争を挟んでおり、資料が残っていない現状もある。

実際、金龍煥の作品は、現時点での韓国において研究するには難しい面があるかもしれない。戦前・戦中の少年・少女雑誌は、「日本国」の国威発揚をする読み物、挿絵、記事、マンガでなければ淘汰されてしまった経緯がある。そのため、研究がしにくいということがあるだろう。一方、金龍煥自身が韓国で出版した、日本での留学時代や出来事などを書いている本や記事はある。しかしながら、後になって書いていることから記憶違いも多いと本人も記しており、また明らかに年号が異なっているものはいくつか見られることから細かく検証していかなければならない不明な部分が多い。

二〇一六年から韓国国会図書館、韓国中央図書館、韓国デジタル図書館、韓国青少年子ども図書館等において金龍煥の作品を掲載していた新聞・雑誌を調査している。資料を見ただけであると、デジタル資料についてはわからないが、現物資料については、最近では誰も触っていない形跡がある。資料が埃にまみれていた。日本の国会図書館と同様に誰も触っていないと、とにかく手が真っ黒

になる。もちろん雑誌の質に大きく関係しているが、丁重に扱わなければ崩れてしまう資料も多かった。デジタル、現物資料ともに欠番が多く、すべて見ることが出来ない。また資料が見つかったもページが破られているということが多かった。最も困ったのは、インクがにじみ読めないという点である。日本からの解放後は日本以上に物質に乏しかったであろうことは、この時代の新聞や雑誌を直に見ることで理解できる。

金龍煥の得意としているものに線画、ペン画と呼ばれるインクで描かれた緻密な挿絵がある。その分野では、樺島勝一が有名である。樺島の線画・ペン画は戦前の少年雑誌において大人気のコンテンツであった。この樺島の線画・ペン画を真似て、挿絵家になるものがあり、その中の一人に金龍煥がいる。おそらく、当時の彼は挿絵家のなかでも線画・ペン画の分野においては五本の指に入るだろう。しかし、日本からの解放後の彼は朝鮮・韓国の雑誌でそれを描くことはなかった。もちろんまだみつからない可能性もあるかもしれない。

彼の新聞・雑誌に掲載された作品のなかに、線画・ペン画がないことは、不思議でならなかった。現地での調査をすればするほど、その理由がわかった。線画・ペン画を描くことのできるインクや紙が当時の朝鮮にはなかったのである。そのため緻密な絵ではない、俗にいうマンガチックな画風でないと紙に文字や絵が載らなかつたと推測できる。おそらくインクではなく、墨で描いていたと思われる。

本稿では金龍煥の代表作「コチュブ」を中心に彼が韓国で活躍した雑誌『アリラン』と新聞『コリアン・リパブリック』から調査結果を報告していく。「コチュブ」とは解放後の韓国を代表するキャラクターである。

現代韓国マンガの父

シンポジウムのタイトルにもなっているように、韓国において金龍煥は現代マンガの父であり、彼の描いた「コチュブ (코치부)」は彼が亡くなってから二十年経てもまだ韓国の多くの人々が知っているキャラクターである。韓国においては解放後のキャラクターとして「コチュブ」は最初であると位置づけることができるだろう。キャラクターといえばやはり「ミッキーマウス」である。もちろん当時日本で活躍した彼はミッキーマウスを知っていたに違いない。日本では「のらくろ」が有名であった。それに準ずるキャラクターも少年・少女雑

誌から登場している。今こそキャラクタービジネスといえば巨大マーケットである。当時は著作権がいまいであるため、現在のビジネスのようなわけにはいかない。しかし、田川水泡の「のらくろ」の例からもわかるように、戦前から人気「キャラクター」を産み出した漫画家こそ、読者の人気の指標をはかることができた。年月がたち、田川水泡の名前は忘れられても「のらくろ」というキャラクターはまだまだ知っている人が多いだろう。同様に韓国においては金龍煥の名前は忘れられても、「コチュブ」を知っている人が多い。

「コチュブ」とは鼻が大きい、ふくらんでいる。あるいは天狗のような鼻という意味である。この「コチュブ」は日本で初出^⑤したキャラクターであり、日本のキャラクターから影響を受けたものと考えられる。「コチュブ」が朝鮮において最初に出てきたのは『ソウル・タイムズ』からである。英字新聞のタブロイド版であった。日本の終戦であり、朝鮮の解放日でもある一九四五年八月十五日以降、表現の自由を得た朝鮮では、新聞・雑誌の刊行ラッシュを迎えていく。物資不足であるため、新聞・雑誌は発刊されては休刊され、名前が変更、あるいは消えていくという運命をたどっていく。需要は多くあったにもかかわらず、供給が間に合わないというのが原因であった。

そんな時代、一九四五年九月六日『ソウル・タイムズ』は発刊された。英字新聞ということからもわかるようにアメリカの機関誌である。そこに左から右に読む四コマの「コチュブ」が掲載された。日本からの解放後、アメリカが「民主主義」を朝鮮に浸透させるための新聞でもあった『ソウル・タイムズ』で、なぜ金龍煥が選ばれたのであろうか。もちろん朝鮮には同時代の漫画家もいた。金龍煥と当時の朝鮮の漫画家との大きな違いは、日本で活躍していたことである。それも戦前の三大少年誌とも言われる『日本少年』『新少年』『少年倶楽部』で掲載していた。

特に戦前、『少年倶楽部』は一九三六年に七十五万部の発行をした大人気雑誌であった。彼の掲載は一九三八年六月号から、一九四五年二月号までではないがほぼ毎月掲載されている。連載作品もいくつもあり、一年続く作品もあった。戦前の日本の物資不足は周知のとおりであるが、大日本雄弁会講談社はページ数を徐々に減らしながらも終戦の年、一九四五年の『少年倶楽部』は、わら半紙の簡易な紙ではあったが発行を続けていた。そんな時代でさえ、大日本雄弁会講談社は彼を選んでいる。同じく大日本雄弁会講談社からの出版であ

る『幼年倶楽部』『少女倶楽部』、さらには百万部以上発行をしていた『キング』にも彼の作品は掲載されていた。まさに売れっ子の挿絵家である。

一九四四年、大日本雄弁会講談社は朝鮮総督府監修のもと、京城練成の友社という出版社名で『錬成の友⁶⁾』を朝鮮で創刊した。一九四三年に徴兵令が施行され、日本語や日本の情勢を教えることを目的とした練成所が朝鮮各地に開設された。その副読本として総督府から大日本雄弁会講談社へ要請された。内容は日本の「国語」の本であり、朝鮮語と日本語の発音の違いなどの記載があり、大きな字で書かれていることが特長である。

そこに白羽の矢が立たったのが金龍煥であったと考えられる⁷⁾。一九四四年創刊号の表紙を飾ったのは「北宏二」であった。

この創刊号から、連載マンガとして「ガンバリ面長サン」が「金龍煥⁸⁾」名義で掲載された。いままでも日本の雑誌では「北宏二」名義で使用してきた金龍煥は、初めて「金龍煥」名義で作品掲載したものであると考えられる。ここで二ページのストーリーマンガ⁹⁾が掲載された。日本の雑誌に掲載された「北宏二」名義の作品は圧倒的に挿絵が多い。戦前の朝鮮の新聞・雑誌では四コママンガのような物語のある作品は掲載されているが、日本の雑誌においては、コマを割るようなストーリーマンガの掲載を見たことがない。日本の雑誌では『錬成の友』での二ページマンガが、ストーリーマンガ家デビューである。それについては前回の紀要に記した。

このようなことから「民主主義」を啓蒙したい『ソウル・タイムズ』が金龍煥を採用した理由に、日本での活躍が大きいと推測できる。当時のアメリカが戦前の日本文化を調査していたことは周知の事実であり、また誰がなにをやっていたのか調査していただろうことは想像に難くない。ましてや日本で売れっ子の挿絵家が朝鮮にいるというのは好都合以外のなものでもなかったであろう。戦前の日本の雑誌は朝鮮でも読まれており、金龍煥の挿絵を見ていた読者も多かった。朝鮮の知識人であった新聞や雑誌を発行する人々の多くも日本で勉強した者が多かった。また金龍煥が日本で活躍した挿絵家であったことは、当時の読者は知らなかったであろうが知識人たちは知っていた。そこにいち早く目をつけたのがアメリカであったと考えられる。

「コチュブ」(코치부)

金龍煥といえれば前述した「コチュブ」が代表的キャラクターであり、「コチュブ」イコール金龍煥と現在でも位置づけられる。実際には、戦後の一時期、朝鮮・韓国で活躍した作家であるため忘れられているのが現実である。作家の名前は忘れられても、キャラクターは現在でも生き続けている¹⁰⁾。

「コチュブ」は韓国のキャラクターであるが、生まれたのは戦前の日本である。しかしながら、日本で「コチュブ」といっても誰も知らない。「コチュブ」のキャラクターは、簡単にいえば「面白いおじさん」である。コメディアンのような面白さではなく、どこにでもいるおじさんであり、おっちょこちょいでいて憎めない。姿は二頭身で「ドラえもん」同様に頭が大きく丸っこい姿をしている。そして鼻が大きい。この二頭身キャラクターは『錬成の友』で連載されていた「ガンバリ面長サン」でその変遷をみる事ができる。一九四四年一月の創刊号では、「面長サン」はまだ四頭身ぐらゐであり、鼻も大きくはなかった。「面長サン」の鼻の大きさは回を重ねる度に特徴的な形となっていく。また四頭身から三頭身になるのも回を重ねるとその姿が顕著になっていく。一月号から十一月号へと連載を重ね、徐々に「面長サン」の姿は変わってきている。定期購読している読者にはあまり気が付かない変遷である。同年の十二月号から、一気に「面長サン」の姿は変わる。いままでも丸みを帯びていなかった「面長サン」の姿は、丸くなったのである。「コチュブ」の原型のような姿が誕生した。キャラクター設定として、「コチュブ」は人々を笑わそうとしているのではなく、いたく真面目に行動をし、それが人々に笑われるというような日本のマンガキャラクターの主要な系統に位置する。もっとわかりやすく言うと、長谷川町子の「サザエさん」のサザエさんの男性バージョンである。「サザエさん」も「コチュブ」も少しのずれはあるにしても、同世代の誕生である。「サザエさん」は福岡の『夕刊フクニチ』での一九四六年の連載からであり、「コチュブ」は一九四五年の『ソウル・タイムズ』からである。実際には、その前に日本で誕生しているが、多くの人に認知される「連載」のかたちをとった『ソウル・タイムズ』ということで一九四五年としておこう。もちろん英字新聞であることから、一般の人々に知れ渡るのもっと後になる。「サザエさん」も「コチュブ」も性別が異なるだけで、二人とも同じような性格のキャラクターとして描かれている。これは彼ら二人だけにあてはまるこ

とはなく、日本のキャラクター、特にマンガの主人公としての典型的なキャラクターであると考えられる。戦前であれば、例えば岡本一平の漫画「人の一生」の主人公「唯野人成」や人間ではないが田河水泡の「のらくろ」の主人公の猫もやはり同じようなキャラクター設定をされている。長谷川町子においては田河水泡の弟子であるという経緯からも理解できる。このような設定となっている主人公は、現在でも多くのマンガの登場人物として出てくる。特に、時事問題を取り上げることの多い新聞連載の四コママンガの主人公の性格設定によく使われる。つまり「サザエさん」も「コチュブ」も、まったく新しい主人公とした性格・性質ではなく、作者である長谷川町子や金龍煥の独自のキャラクター設定とは言えないと考えられる。マンガではないが、江戸時代の十返舎一九の読物「東海道中膝栗毛」の主人公である、弥二さん、喜多さんもこのキャラクターのカテゴリに入るだろう。つまりマンガ独自のものでなく、読物の登場人物としてすでにストーリーマンガが確立される以前から物語のなかで登場していた。

では「コチュブ」自身のキャラクターを見ていきたい。「コチュブ」は二等身で丸っこい人物であり、「ドラえもん」のような容姿である。「コチュブ」は名前の通り、鼻が大きく、気のいい小父さんで可愛い。金龍煥がまだ朝鮮に住んでいた一九五二年八月号の講談社⁽⁵⁾出版『面白倶楽部』で掲載された「のんきな小父さん」というマンガがある。ペンネームは「北宏二」となっている。この小父さんが「コチュブ」に似ており、日本版「コチュブ」といえる。

「のんきな小父さん」は大正時代、麻生豊が生み出した「ノンキナトウサン」から影響を受けている。もちろん題名からもすぐにわかるが、「ノンキナトウサン」を読者に想起させるためのタイトルである。映画化されていることもあり、当時の人々には「ノンキナトウサン」はお馴染みのキャラクターであった。大正時代に一世を風靡した漫画であり、「ノンキナトウサン」を真似た作品は、それ以後多く生み出されることになる。現在のように著作権を主張する時代でなかったからこそ、日本のマンガは発達してきた歴史がある。まさしく「ノンキナトウサン」はそのなかでも代表的なキャラクターの一つであった。金龍煥が実業之日本社発刊の少年雑誌『日本少年』で掲載した同じ時期に、那須良輔の「のんきな殿様」が同雑誌に掲載されている。

ある大きなキャラクターが一般に認知されると、そこから派生したキャラク

ターが次々と生み出されるのが日本のマンガの世界である。

麻生豊の「ノンキナトウサン」もまた元ネタのマンガがある。日本の『日刊アサヒグラフ』に翻訳掲載されていたアメリカのジョージ・マクマナスの「親爺教育」に原型がある。これはキャラクターの容姿というよりも、マンガの描き方、例えば吹き出しや構造などが影響を受けている⁽¹²⁾。アメリカから日本へ、日本から朝鮮へと形をかえながら『ソウル・タイムズ』へと受け継がれている。つまり「コチュブ」の四コママンガは、英字新聞の一面の下を飾ることができ、英語を使用する読者にとっても受け入れやすいマンガであっただろうと考えられる。

『ソウル・タイムズ』を皮切りに、彼の朝鮮・韓国での漫画・マンガ家としての活動は活発になっていく。金龍煥は朝鮮で最初のマンガ家団体を起ち上げ、マンガの同人誌⁽¹³⁾を出版している。当時、物資のない朝鮮で出版は、たやすいことではなかった。現在、朝鮮・韓国で金龍煥が起ち上げた雑誌、あるいは彼の作品を掲載していた雑誌を調査していくと、発刊されては消えていく新聞・雑誌が多いことがわかる。

前回の紀要でも記述したのだが、金龍煥の韓国での弟子であった蘇在必氏は、金龍煥が起ち上げた出版社に残った。現在、彼は旅行雑誌を出版している。まだ金龍煥が韓国で興した出版の影響は続いている。

「コチュブ」は作者自身

『ソウル・タイムズ』で掲載されていた「コチュブ」は、キャラクターを生み出した金龍煥の姿として流通した。これは、作者が「コチュブ」に自身を投影していることに起因している。「コチュブ」は三コママンガや四コママンガ、あるいは短編・長編のようなストーリーのあるマンガの主人公だけではなく、風刺漫画でも登場している。日本では風刺漫画を描く漫画家とストーリーマンガを描くマンガ家は別の職業であると考えられる傾向がある。実際、日本で両方やっている漫画家を想像してみると、なかなか思い当たらないのではないか。

風刺漫画は、日本では新聞に掲載されることが多く、現実社会の世相や政治を風刺することが多い。特に社説やコラムの近くに掲載されることが多く、漫画家であるよりもジャーナリストとしてのセンスがないと描けないことが多い。日本では近藤日出造や山藤章二という名前で想像できるだろう。一方ストーリー

「マンガは、雑誌掲載されるマンガ家であり、手塚治虫や藤子不二雄に代表される。彼らは作者として名前が記載されるに対し、風刺漫画家は、作者の名前が記されていないこともある。絵の中に署名があることもあれば、ないこともある。新聞の風刺漫画や四コママンガは、決まった新聞を読んでいる定期購読者にとり、作者の記載などなくともわかることが多い。つまり新聞社お抱えの風刺漫画家、四コママンガ家がいる。

ところで、一つの新聞で風刺漫画と四コママンガ、ともに同じマンガ家が描いていることをみたことがあるだろうか。金龍煥は一つの新聞に風刺漫画、四コママンガともに描いている。これは金龍煥の例だけではなく、同じ時代の漫画家である「熊超」⁽¹⁴⁾もまた風刺漫画と四コママンガともに描いているのを見つけたことがある。これは戦後まもない新聞であったことから、漫画・マンガの描き手が少なく、決まった作家に仕事がまわってきたことの表れだろう。金龍煥もその例外ではないだろう。実際に日本でも同じ雑誌に名前を変えて連載を持つているという例があるように、ペンネームを変えることにより、マンガ家不足を補っている面がある。「コチュブ」は風刺漫画にも四コママンガにも登場するキャラクターである。

「コチュブ」は「ノンキナトウサン」や「サザエさん」、「ドラえもん」のように連載、掲載を重ねるごとにキャラクターが成長し、最初の設定を崩さないまでもいくつかの設定が足されていく。つまりある特定のキャラクターは、連載、掲載を積み重ねることによって重層された人物となっていく。「コチュブ」もやはり同じ過程を経ている。しかし、「ノンキナトウサン」や「サザエさん」、「ドラえもん」と大きく異なるのは、「コチュブ」が新聞の風刺漫画に登場して点である。

のらくろを田河水泡に、サザエさんを長谷川町子に、鉄腕アトムを手塚治虫に、ドラえもんを藤子不二雄に、同一視することはあまりないだろう。戦前や戦後の娯楽のない頃、幼少期を過ごした子どもたちは作者とキャラクターを同一視していたとも考えられるが、別のつく年齢になればキャラクターはキャラクター、作者は作者と考えるようになる。「コチュブ」の場合はこの反対であり、金龍煥と同時代の読者にとり、「コチュブ」は「漫画家自身」であると認識され、年月を重ねた連載、掲載によって同一視を醸成していった。

まず、「コチュブ」は金龍煥に似ており、キムが自身の似顔絵を描く時は「コ

チュブ」を描くことがある。つまり作者によってキャラクターとの同一視がなされている。例えば一九五五年一月号の『소년 세계 (少年世界)』の目次に「コチュブ」の絵が出てくる。そこには金龍煥の名前はないが、「コチュブ」が「次回はドンキホーテよりも面白いものを描く」と宣伝している。作者のメッセージを、キャラクターが代わりに言っている。

加えて、風刺漫画に「コチュブ」が登場したことにも起因している。風刺漫画は世情を背景とし、風刺漫画家（あるいは新聞社）の意見が最も絵に反映されやすいメディアである。そこに「コチュブ」が登場していれば、作者の意見であると読者も自然と思う。

例えば政権が替わり重い税金をかけられることになれば、絵のなかの「コチュブ」は税金にあえぐ無辜の人として描かれる。この無辜の人は作者でもあり、読者でもある。この風刺漫画を見ている読者は「コチュブ」と同じく重い税金をかけられる人々である。「コチュブ」のキャラクター設定であるおっちょこちよいな小父さんは、作者でもあると同時に読者にも投影される。作者も読者も同じ時代を生きる人間である。作者には、読者の共感を得られる風刺漫画を描く人が選ばれることからまさに理にかなっている。また「コチュブ」は、好奇心旺盛で当時の韓国の人々が行けなかった外国へと旅行に行っている。日本への興味が多いのか、日本の文化を「コチュブ」が紹介しているものもあれば、掲載当時の日本の世相を描いたものもある。そんな風刺漫画はエッセイの要素をおびている。

雑誌『アリラン (아리랑)』

「コチュブ」のキャラクター設定の形成過程において大きな役割を果たした雑誌である『アリラン』を調査した。雑誌『アリラン』は一九五五年三月にアリラン社から創刊された雑誌である。当時、字を読めない人々もおり、絵が多いことも特徴である。対象は大人であり、男性向きの面が記事から読み取れる。もちろん現在のような男性のみを対象とした雑誌ではなく、女性でも楽しんで読めるものである。当時は韓国だけでなく、日本でも、どの国でも大衆誌は男性向きの誌面が多い。『アリラン』は、戦前の大日本雄弁会講談社が発刊していた『キング』のような誌面構成である。戦前の『キング』は百万部を誇る雑誌であった。もちろん朝鮮にも出回っていた。子どもを対象とした雑誌ほどで

はないが、挿絵がよく使用されており、文章だけでない現在の大量雑誌の先駆けであった。

韓国の国会図書館で調査したところ、この創刊号が欠番であったため、四月号から見ていった。四月号に、金龍煥はなんと七作品も掲載している。奥付ページが三百二十六頁であることから、読み応えのあるページ数ではある。そのなかでも七作品というのは雑誌『アリラン』がいかに金龍煥に仕事を頼んでいたかを示す事実でもあるだろう。

一つ目の作品はジョン・スタインベックの「에덴 동산(エデンの東)」の翻訳された小説の挿絵である。署名は「金龍煥」とある。

二つ目の作品の作者は玄名運、明朗小説「배꼽민의 검은 점(おへその下の黒い黒子)」という読み物であり、「木丁」という署名がある。

三つ目の作品も読み物である。作者は崔仁旭、「명구夫妻(ミョング夫妻)」。挿絵には「龍煥」とある。

四つ目の作品は、連載漫画第二回「오성과 한음(オソンとハンオム)」という、朝鮮では有名な民話である。署名は「金龍煥」とある。四ページマンガで、三十一コマある。ここに連載第二回とある。つまり創刊号から、このマンガが掲載されていたことがわかる。

五つ目の作品は「오ソンとハンオム」のマンガの次ページにある「코치부 산만화紀行(コチュブ釜山漫画紀行)」である。二ページのなかに、「コチュブ」が釜山旅行での経験を、コマを割らないエッセイマンガとして描いている。署名は「金龍煥」。このなかで、作者である金龍煥は、「コチュブ」として自分を描いている。友人の小説家・鄭飛石と一緒に釜山へと旅行に行く。最初の絵は、「コチュブ」と鄭とが、機関士体験をしながら釜山へと向かう駅の場面が描かれる。そして「コチュブ釜山漫画紀行」の次ページには、鄭飛石の小説「暴君燕山君」が掲載されている。

六つ目の作品は「雌雄의 飛劍(雌雄の飛劍)」という、作者が李星となっている中国のお話である。署名は「木丁」となっている。

七つ目の作品は、探偵小説「붉은 나미(赤い蝶々)」である。署名は「金龍煥」となっており、作者は金未成である。先ほどの鄭飛石、金未成ともに戦前に日本へ留学し、いまでも彼らの小説は日本で買うことができる。

以上が雑誌『アリラン』二号の金龍煥作品である。韓国の国会図書館にある

『アリラン』の一九五九年九月号まで調査した。欠番も多く、すべてを調査するということはできなかったが、雑誌『アリラン』に金龍煥は多くのマンガを描いていたことがわかる。また名前を「金龍煥」「김용환(ハンゲル表記の金龍煥)」「金龍煥」「竜煥」「용환(ハンゲル表記の竜煥)」「木丁」と使い分けているのは、何らかの意味がある⁽¹⁵⁾とも考えられるが、現時点では不明である。一雑誌に同じ挿絵家、マンガ家がこれだけ多く描いていること自体が、不自然であり、おそらく金龍煥自身が『アリラン』創刊に関し、なんらかの役割を果たしていたのではないかと想像できる。それは日本解放後、彼は韓国で初めての大人向け漫画雑誌『漫画行進⁽¹⁶⁾』を創刊したからである。

当時の読者には、「金龍煥」「김용환」「金龍煥」「竜煥」「용환」「木丁」が同一人物であるという認識はなかったのかもしれない。前述したが、マンガ家は一つの雑誌でいくつか描く時は、署名を変えることが多く、それは日本の雑誌からもわかる。またちょっととした挿絵の場合、署名のないことも多い。そのため、名前無しで描いていることも多い。また雑誌であることから、広告収入が重要視されるのは周知のとおりであり、「広告漫画」は署名がなく、誰が描いたものかわからない。しかし、タッチをみると金龍煥でないかと推測できるものも多い。もちろん金龍煥以降のマンガ家は彼の作品タッチの影響を受けていることから、別のマンガ家とも考えられる。

金龍煥は一つの画風ということがなく、いろいろなタッチで作品を描いている。そのため署名がない場合は特定しがたいが、同じ新聞や雑誌の挿絵になんらかの彼の痕跡がある場合は、金龍煥であることが特定できそうである。

『アリラン』では「コチュブ」も連載されており、その際、作者である金龍煥の写真が掲載されていることがある。これもまた「コチュブ」と作者を、読者が同一視することとなった起因でもある。その写真が「コチュブ」にそっくりである。金龍煥をキャラクターライズするとまさしく「コチュブ」そのものであり、読者に同一視させるような描き方をしている。

また『アリラン』においては、エッセイと挿絵を担当しているものがある。一九五六年一月号から「코치부 美国 코치부 신(コチュブアメリカ通信)」が連載される。アメリカへの旅行をエッセイと挿絵にしている。題名からもわかるように、「コチュブ」がアメリカでの体験を書いている。この「コチュブ」は金龍煥自身でもある。もちろんマンガ調で描いてあることから、その旅行は珍道中で

あり、読者が楽しめる描き方をしている⁽¹⁷⁾。

『アリラン』の一九五六年の一月号と二月号は調査できたのだが、三月から八月号までは欠番であり、そのまま続いたかは現在のところ不明である。しかし二月号の「コチュブアメリカ通信」の最後の文字は「続く」であることから、三月号にも掲載されたと考えられる。九月号では「コチュブアメリカ通信」は掲載されていないことから、九月号以前に連載は終わったのだろう。『アリラン』での「コチュブアメリカ通信」だけでなく、金龍煥がアメリカへと旅立つ記事が新聞の『コリアン・リパブリック』に掲載されている。

新聞『The Korean Republic (「リラン・リパブリック」)』

『コリアン・リパブリック』は一九五三年八月十五日に創刊された英字新聞である。『アリラン』と同時期に「コチュブ」のマンガが掲載された。『コリアン・リパブリック』は、日本の国会図書館に一九五五年八月十五日から収蔵されており、それをもとに論じていく。新聞の名前の通り、韓国に民主主義を啓蒙する目的の新聞であるとともに朝鮮戦後の韓国の現状を英語で伝える機関誌である。この新聞に金龍煥は風刺漫画とコマ割りマンガの二つを任されている。『ソウル・タイムズ』同様に、横コマに描かれたマンガが「コチュブ」である。『ソウル・タイムズ』では四コママンガであったが、『コリアン・リパブリック』は三コママンガであった。もちろんキャラクターは、『ソウル・タイムズ』を受けての「コチュブ」である。英語表記は「KOCHUBU THE BIG NOSE by Yong Hwan Kim」とある。「コチュブ」という朝鮮語を知らない人でも、「コチュブ」には大きな鼻がついているとわかる。『コリアン・リパブリック』でも専属のマンガ家であった。一九五五年八月十五日号での風刺漫画は三つの山が描かれ、一番小さな山の頂上に旗がたてられており、そこには「一九四五年八月十五日、日本からの解放」と書かれている。真中の中ぐらいの山の旗には「一九四八年八月十五日、民主主義宣言」と書かれている。一番大きな山は「人」が今まさに登っている状態が描かれている。これはまだまだ韓国には登らねばならない山があることを示すとともに、『コリアン・リパブリック』自体を表している。一方の三コママンガの「コチュブ」は、典型的な四コママンガで描かれる滑稽マンガである。一コマ目に「コチュブ」が車を運転している場面が描かれている。二コマ目は、「コチュブ」がその車からタイヤを取り出している。三コマ

目のオチでは、「コチュブ」がそのタイヤを浮き輪の代用として水遊びをしている場面で終わる。次の日の「コチュブ」は、「抽象芸術」に困惑する三コマが描かれ、彫刻、絵画、音楽と抽象芸術を理解できない「コチュブ」が滑稽に描かれている。翌々日は、綺麗な服を着て歩いている女性の背景があまりに殺風景なので、女性の後ろにパリの風景の絵を持った「コチュブ」が女性とともに歩くというマンガである。風刺漫画では、その時に起こった出来事を漫画で描いているのに対し、「コチュブ」の三コママンガは読者に一息つかせるためのマンガとして効果を出している。そんな「コチュブ」が二か月も経たずに『コリアン・リパブリック』から姿を消してしまった。

一九五五年十月三日付けの三コママンガのなかの一コマ目で「コチュブ」は旅行代理店へ赴いている。二コマ目は、店員に船での旅を勧められるが、「コチュブ」は飛行機で行きたいと言っている。三コマ目は、「コチュブ」は船会社の代理店へ来ていたというオチのマンガが掲載される。

翌日、十月四日号では、『コリアン・リパブリック』に別れを告げる。「コチュブ」は読者にさよならを言うことを忘れたと気が付き、挨拶をする。というマンガとなっている。またこの日、金龍煥は文章で次のようなことを述べている。

読者の皆様、私は今日アメリカへ出発します。この旅行で、私の姿(マンガ)はしばらく中断されるでしょう！
しかし、私は、この旅行の間に、私の経験をみなさんにお届けできるようにしよう！⁽¹⁸⁾

十月五日をもって『コリアン・リパブリック』から金龍煥はいなくなるとともに「コチュブ」の姿もなくなる。一九五五年の八月十五日から十月四日まで続いた金龍煥の「コチュブ」と彼の風刺漫画はなくなる。新聞記事には、金龍煥がアメリカへ昨日旅立ったことが写真付きで掲載されている。アメリカ滞在中も金龍煥は『コリアン・リパブリック』に漫画を送ってくると記事に書いている。この日から風刺漫画に署名はなくなるが、風刺漫画の画風は金龍煥によく似ている。加えて、彼が使用していたキャラクターも署名のない風刺漫画のなかでは登場している。

十月十三日、「クリスマスプレゼントにコチュブのマンガはどうですか」という「コチュブ」の絵の入った販売促進広告が掲載される。この広告は十月十八日、二十一日、二十二日、二十九日、十一月四日と掲載されている。本来は広告であるが、「コチュブ」は『コリアン・リパブリック』に読者を示すことになる。国会図書館にある資料は一九五五年十二月八日までである。その後、保存されている『コリアン・リパブリック』は、一九五六年十二月十日へととんでいる。この日の風刺漫画も金龍煥である。ここから、一九五七年四月四日まで保存されている。この後は欠番が続く。そして、一九五七年八月十五日から十二月七日まで、署名のないものも少しあるが風刺漫画は金龍煥が担当している。つまり、一九五五年八月十五日から一九五七年十二月七日までの『コリアン・リパブリック』の風刺漫画は金龍煥であるといえるだろう。

この後、資料は欠番が続き、一九六二年三月二十七日から見るとコママンガはアメリカのマンガとなっている。「スヌーピー」でおなじみのチャールズ・モンロー・シュルツの「ピーナッツ」やハンク・ケッチャムの「デニスザメナム」が掲載されている。一九五九年に金龍煥は日本に戻ってきていることから、どこかの地点で担当から外れたのだろう。

おわりに『자유의 벗 (自由の友)』

金龍煥が一九五九年に日本に戻ってきたのはUN軍⁽⁹⁾からの要請であった。『ソウル・タイムズ』『コリアン・リパブリック』と英字新聞の担当であった金龍煥がUN軍に呼ばれたことは当然のことであるだろう。また、前述した『アリラン』と『コリアン・リパブリック』からもわかるように、アメリカからの要請でアメリカへ旅行に行っていたことがわかる。当時の朝鮮は物質が乏しく、極東指令部は日本にあり、その出版局も日本にあった。そこから発刊された雑誌こそ『自由の友』である。この雑誌は当時の韓国では考えられないようなカラー写真が多用されている。もちろん誌面には「コチュブ」も登場している。『ソウル・タイムズ』『コリアン・リパブリック』は英字新聞であることから、知識階級への啓蒙活動と考えられるが、機関誌であることから英字で伝える朝鮮・韓国の民主主義化を目的としている。当時の朝鮮・韓国ではハングルを読めない人々もおり、『ソウル・タイムズ』『コリアン・リパブリック』は、一般向けでなく、英語を使用する人々向けである。

一方、『自由の友』はハングルで書かれている。つまりハングルを使用する人々を対象としている。また写真を頻繁に使用しており、挿絵やマンガも多く、ハングルを読めない人でも楽しめる雑誌である。この『自由の友』は日本から米軍経由で韓国に持ち込まれた。現段階の調査において日本での所蔵が見つけられない。

韓国のネットで調べてみると、韓国でも貴重な資料であるようだ。ネットには『自由の友』の表紙がのっているものがいくつか見つかることから、持っている人がいるのは間違いない。二〇一六年に韓国の中央図書館で調査したときは、マイクロフィルムで見せていただいた。保存が悪いのか、資料をマイクロフィルムにした時の状況がよくないのか、判読できない状態にあった。そのため現存する『自由の友』自体の状態が良くないのではと考えた。他の資料を調べた時もやはり同じような状況であったからだ。しかし二〇一八年に再度訪れた時、現物を見る機会に恵まれた。もちろん年月は経っているが、とてもきれいであった。インクがにじんでいる箇所もなく、カラー写真が使用され、朝鮮・韓国の新聞や雑誌でみつけられなかった金龍煥の線画・ペン画が掲載されていた。同時代の雑誌『アリラン』と比べると、紙の材質の違いが一目瞭然であった。

本論では「コチュブ」をめぐる英字新聞と、それに関連する『アリラン』から、金龍煥が再来日する理由を述べた。一九五〇年代の彼の活動は雑誌『소학생 (小学生)』『아동클럽 (児童クラブ)』『소년세계 (少年世界)』『학원 (学園)』『학생계 (学生界)』『소년생활 (少年生活)』『소년계 (少年系)』等と、朝鮮戦争を挟んで活発となっていた。もちろんこれらの少年雑誌にも「コチュブ」は登場している。『少年生活』の一九五八年十一月号には、「コチュブ」の子ども時代から、日本に絵を勉強するために留学したこと、今でも変わることなく絵を描き続けている金龍煥自身の人生のマンガが掲載されている。

日本に戻ってきた彼は、UN軍の雑誌『自由の友』と同時並行し、古巣の講談社で『少年クラブ』『ぼくら』『週刊少年マガジン』と韓国での活動とはまた違った作品を描いていくことになる。一方、「コチュブ」は日本国内では、在日の人々の新聞『統一日報』で復活を果たしていく。韓国内では、日本の世情や文化を紹介する記事を新聞・雑誌で掲載しており、「コチュブ」が登場することもあった。

一九六五年、日本と韓国は国交を結び、一般の人々も行き来できるようになる。金龍煥は国交のない時代に日本と韓国をまたにかけた稀有のマンガ家であった。

謝辞

本研究はJSPS 科研費18K00151の助成を受けたものである。加えて、京都造形芸術大学二〇一八年度特別制作研究費助成(一般)「マンガ家の北宏二／金龍煥の懸隔」による研究成果の一部である。韓国語の翻訳を李仙姫氏に、韓国内の調査の通訳を朴彩恩氏、申智娟氏にお願いした。

「朝鮮」表記は朝鮮戦争休戦前を指し、「韓国」表記は朝鮮戦争休戦後を指す。「朝鮮・韓国」表記は朝鮮戦争をまたがっている時に使用した。また「漫画」は風刺漫画などの時事的作品を指し、「マンガ」はストーリーマンガを指すこととした。

註

- (1) これは一九〇八年から一九一九年に発刊された『日本百科大事典』の後を受けての百科事典であった。「図解」とタイトルにあるように、絵や写真をふんだんに使用しており、「字」だけの百科事典とは一線を画す書籍である。ただ事典であることから、署名などはなく、あったとしても師匠の江島武夫の名前のみであるだろう。
- (2) 牛田あや美「日本における金龍煥の発見」『京都造形芸術大学紀要 二十二号』京都造形芸術大学、二〇一八年
- (3) 김소원 (キム・ソウォン)「김용환의 일본에서의 작품 활동」『연구 1930년-1940년 대 삽화(插絵) 중심』(金龍煥の日本における作品活動研究—一九三〇年代から一九四〇年代の挿絵を中心)』『만화애니메이션연구』(韓国漫画アニメーション学会) Vol.1 No.33』, 만화애니메이션연구 (韓国漫画アニメーション学会)、二〇一三年
- (4) 공영민 (コン・ヨンミン)「아시아재단 지원(支援)을 통한 김용환의 미국 기행과 기행(論文)은二〇一四年의政府(教育部)의財源(財源)で韓国研究財團(財團)의支援(支援)を受けて遂行(遂行)された研究(NRF-2014S11A5A2A03065347)である。雑誌に掲載された記載は

なく、ネットのみでの報告書のような。

- (5) 金龍煥が戦前の日本において在日本の朝鮮人のために自費で『少年朝鮮日報』を発刊した。そこで「コチュブ」が最初に出てきた。しかし、その雑誌は現段階では見つからない。一九七四年一月一日、大韓民国の機関誌である『統一日報』から、日本での「コチュブ」は再度登場する。
- (6) 『錬成の友』は朝鮮での日本語教育のための雑誌であることから、日本語ですべて記述されている。性質としては戦前の小学一、二年生で使用される「国語」の教科書に似ている。また大日本雄弁会講談社から発刊されていた『幼年倶楽部』とも似ている。内容は日本のものであるが、朝鮮の人々に興味を持ってもらえるような、朝鮮に昔から伝わる民話なども掲載されている。
- (7) 彼の韓国から出版された漫画図録には、大日本雄弁会講談社の囑託として一九四五年に韓国へ戻ってきたとプロフィールに書かれている。つまり日本の終戦日、一九四五年八月十五日を彼は母国で迎えることになった。目次では「金龍煥」となっているが、漫画に書かれた名前は「金竜煥」となっている。
- (8) 日本のストーリーマンガの確立は戦後の手塚治虫と言われている。もちろんそれ以前にも田川水泡の「のらくろ」のようにコマを割った四ページマンガも存在した。金龍煥は『日本少年』『少年倶楽部』では挿絵家として有名であり、大人向けの雑誌にはコマを割らないマンガは描いていた。
- (9) 牛田あや美、前掲書
- (10) 戦後、大日本雄弁会講談社と名前を変更している。
- (11) 清水勲「図説漫画の歴史」河出書房新社、一九九九年
- (12) 雑誌『漫画行進』。漫画家たちの同人誌ではあるが値段もついており、新聞『平和日報』一九四八年九月十九日、十月十九日と雑誌の宣伝が掲載されている。当時の政府批判を漫画で描いたことにより、すぐに強制廃刊された。
- (13) 韓国のマンガ家・金奎澤のペンネーム。熊超の風刺漫画は一九四六年以降の『朝鮮日報』でみることが出来る。戦後の『朝鮮日報』は風刺漫画が少ない。
- (14) 「金龍煥」表記は、写真植字されていることが多い。「木丁」は昔話の挿絵の時に使われることが多い。「김용환」「용환」「金竜煥」「竜煥」は手書き
- (15)

印刷されたときに使用されることが多い。

一九四八年九月十五日発刊。

(17) (16)
ゴン・ヨンミン氏の「아시아재단 지원을 통한 김용환의 미국 기행과 기행 만화 (アジア財団の支援を通じた金龍煥のアメリカ紀行と紀行漫画)」のなかで金龍煥がアメリカへ行った経緯が書かれている。論文には朝鮮戦争後のアジア財団 (UN (国連) 軍のなかにある) が行った支援の一つとして韓国のマンガ家をアメリカに派遣したことが書かれている。この論文によると金龍煥にとり、この旅行は決して楽しいものではなかったようである。

(19) (18)
『コリアン・リパブリック』大韓公論社、一九五五年十月四日。拙訳

一九五〇年に勃発した朝鮮戦争の際、多国籍軍として置かれた国連軍である。後方司令部が日本にある。そのため金龍煥の作品が、彼がどこに在住していても神出鬼没に日本、韓国で掲載されたと考えられる。